

# 言語学の研究について

井谷 玲子

全ての科学がそうであるよう、言語研究方法には二つの代表的アプローチがある。一つは帰納的方法（inductionist approach）と呼ばれるもので、アマゾンの奥地に至るまで世界の言語データを集め、そこから一般的規則を引き出すものである。もう一つは演繹的方法（deductionist approach）と呼ばれるもので、代表的な言語データを基に、ある仮説をたて、その仮説を反例となる言語データに直面するまで保ち、反例であると判明した時に、その仮説を洗練して行くという手順をとるものである。さて、前者の方法を採用する場合、物理的に不可能な壁にぶつかる。それは世界中の全ての言語データを収集するのは、時の流れを止めて、言語の変化をフリーズしない限り、不可能であるからである。又、如何なる言語の話者であれ、無限に新しい文を作り得るという事実も、全ての言語データを網羅することが不可能であることを明らかに示している。

チョムスキーは言語学を科学（science）の地位に高めた言語学者であるが、研究方法としては後者の演繹的方法を採用している。彼の研究方法は、代表的な文法的に正しい文からある仮説をたて、その仮説を言語データに照らしあわせることである。

帰納的方法よりも演繹的方法が科学としての言語学のアプローチとして妥当であるという立場は、自然社会科学に関する哲学者であるカール・ポPPERの科学的仮説に対する見解によっても支持される。彼は、無限のデータから一般的法則、原則を引き出すということにおいて、その真実性の実証されることは不可能であるが、反証（falsify）できるとする。つまり、いくら数多くの白い白鳥を観察しても“All swans are white”という仮説を実証することは出来ないが、一匹でも黒い白鳥（実際存在するのだが）観察すれば、この仮説は反証される。即ち、ある仮説が科学的であるかないかの区別は反証できるかできないか（falsifiable or not）に依存するとする。

チョムスキーは、1957年に“Syntactic structure”（統語構造）を出版し、変形生成文法理論を唱えたが、それ以来、人間の言語能力を解明しようとするチョムスキーの文法理論は数々の変遷を辿ってきた。それはまさに、初期の彼の理論が現実には観察される言語を相容れない非文法的な文を生成した為、捨てられたり、修正される必要があったからである。つまり、チョムスキーの文法理論が反証可能であることを示しており、それが科学理論であることの言い換えとなっているのである。

チョムスキーの文法理論の修正を簡単に見ると、例えば1957年の“Syntactic structure”では‘意味’が排除されていたが、1965年に出版された“*Aspects of the Theory of Syntax*”（統語理論の諸相）の中の標準理論では‘意味’部門が導入され文の意味解釈を記述している。そして、Neg 挿入（否定文を作る際の変形規則）、命令文削除（命令文を作る際の主語‘You’を削除する変形規則）などが1981年に提唱された“*Government and Binding Theory*”（統率束縛理論/GB 理論）では、‘Move  $\alpha$ ’というメタ的変形規則で包括されている。

先に述べた哲学者ポPPERの見解は、如何なる科学理論も究極的に実証されることはなく、たとえ、多くのテストで生き残れるよう修正され、新理論に変身していったとしても「さあ、これが真実を語るものだ」と言えるものは存在しないことを意味する。このことを念頭に置くと、チョムスキーの生成理論が大きく変遷してきたことに対する妥当性、必要性に気がつくと思う。

言語学に携はる一人として、チョムスキー理論の変化にとまどいを感じることは否定できないが、‘真実’という概念が科学理論とを発展させる上で重要な動機となっている事実を受け入れる限り、同じ理論、仮説に長く固執し修正しない方が不健全であるように思われる。

参考文献：

A Dictionary of philosophy, Pan Reference